

# 現代スポーツを考える

## — スポーツにおける和製英語について —

岡部 修一<sup>1)</sup> ・ 山中 愛美<sup>2)</sup>

1) 奈良産業大学 (現：奈良学園大学) 情報学部

2) 育英西中学校・高等学校

## Essay of the Present-day Sports — Japanized English Words on Sports —

Shuichi Okabe<sup>1)</sup> ・ Aimi Yamanaka<sup>2)</sup>

1) *Faculty of Informatics, Nara Sangyo University (Present Nara Gakuen University)*

2) *Ikueinishi Jr. & High School*

日本語では、外来語や和製英語（和製外来語を含む）の語彙を使った表現が非常に多い。この傾向はスポーツ関連の表現でも同じように見受けられ、スポーツ界ではさまざまな和製英語が使われてきた。スポーツは外国で発祥し日本に伝えられたものが大多数で、スポーツを表現する上では敢えて日本語訳した語彙より、外来語や和製英語など横文字の方がなじみ易いといえる。

外来語や和製英語まで駆使して表現する日本語の幅広さ、自由度については評価される一方、昨今の外来語の氾濫について批判する意見も根強い。そしてスポーツ界では、これまで使ってきた和製英語が外国人には通じない間違った恥ずかしい表現ゆえ、正しい語彙に言い換えようとの風潮がある。

しかし例え外国では和製英語であろうと、すでに長い年月にわたって使われ、語彙として定着した日本独特の表現を、あえて忌避しようとすることは本当に必要なのかとの観点で考察した。

キーワード：スポーツ、和製英語、外来語の濫用

## 1. はじめに

ラグビーにはノーサイド (No side) 精神というラグーマンが誇る概念がある。試合終了のホイッスルが鳴った瞬間、激しく戦った両チームに敵味方というサイド (Side) の区別が無くなり、ともにラグビーを愛する同好の士として互いの健闘とフェアプレーを称え合うというものである。シンガソングライター松任谷由美が、高校ラグビー史上で伝説の決勝とされる名勝負に感銘を受け作曲したといわれる「ノーサイド」が大ヒット、これを契機にノーサイドという言葉が、ラグビー関係者や愛好家の間だけでなく、一般の人々の間にも認知されたといわれている。

---

1) 岡部 修一 〒636-8503 生駒郡三郷町立野北3-12-1 奈良産業大学 (現：奈良学園大学) 情報学部

2) 山中 愛美 〒631-0074 奈良市三松4-637-1 育英西中学校・高等学校

タックルに代表される激しいぶつかり合いや倒し合いなど格闘技的要素の強いラグビーは、イギリスで発祥し、貴族や富裕階級が独占する形でのスポーツとして発展した経緯をもつ。紳士のスポーツを標榜するだけに、猛果敢さと知性、理性の両立を体現するためには、試合が終われば友情や親愛の情、敬意を示すことが肝要であったと考える。そしてラグビー独自の慣習である「アフターマッチファンクション」は、試合終了後に行う友好親睦の交流会として外国では酒を酌み交わし、日本では軽食とソフトドリンクで行われることが多い。試合での敵味方同士が終了後に親しく交流する慣習は、まさにノーサイド精神の具現化といえる。

また日本では長らく、試合終了宣言にノーサイドを使っていたが、現在では使われていない。敵味方の区別がなくなるという意味で考えれば、ラグビー独特の「ノーサイド」は一般的な「フルタイム」や「タイムアップ」よりも試合終了を象徴する表現として秀逸である。しかし古い英語表現のため海外ではもう使われず、現在では外国人ラグビー選手にも語彙として通じない。外国で通じない古い表現は日本でも使うべきではないとの考えによるものか、試合終了宣言としてのノーサイドは姿を消した。

しかし、外国人に通じず、正しい英語表現ではないからとの理由で、和製英語を排斥しようとするのは、本当に正しいことだろうか。外国で通用することを重視して正確な表現ばかりに固執するのは、江戸時代の鎖国政策に端を発した日本人の外国語人への苦手意識や外国語コンプレックスの発現に思えてならず、個人的には非常な違和感を覚えてしまう。スポーツ界では数多くの和製英語（和製外来語）が使われている。その傾向がとくに顕著な野球やゴルフについて、和製英語の意味合いを考えてみる。

## 2. 日本語における外来語について

日本語は漢語の語彙を取り入れる形で、古くから外来語や外国語を表現に取り入れてきた。そして昨今、外来語・外国語の使用はますます増加している。「ロゴをリニューアルすることによるブランディング」「グローバルスタンダードなイノベーション」「極上のライフスタイルからインスパイアされたエクゼクティブスペース」「レゾナートル（存在理由）」「デジャヴ（既視感）」など、英語だけにとどまらずフランス語その他の言語も含め、今日の日本語には外来語由来の横文字が氾濫している。

平成7年の文化庁の世論調査では、今以上に外来語や外国語が増えることについて「多少は増えてもよい」が44.8%と最も高く、以下「今以上には、増えない方がよい(30.4%)」「いくら増えてもよい(13.1%)」「減る方がよい(6.6%)」「分からない(5.0%)」と続いている。外来語の増加に対してはそれほど抵抗を感じていない人が多く、特に若い世代には増加容認の割合が高いという結果が出ている。

しかし、次のような観点から、日本語の中での外来語・外国語の過度の使用については何らかの歯止めが必要であるとする声も上がっている。

- ① 同じような言葉が日本語にあるにもかかわらず、外来語・外国語を使うのは日本語の軽視につながり、日本語の伝統を崩すことになる。
- ② 外来語・外国語を使う傾向は特に若い世代に多く、こうした語の多用が世代間のコミュニケーションにとって障害になる可能性がある。

③ 原語の意味から外れた誤った外来語使用やいわゆる和製英語の濫用は避けるべきである。日本語を乱すだけでなく、日本人の外国語学習にとっても障害となる。

国際化の進展や新技術の開発などに伴って、新しい概念やニュアンスの提示など、外来語・外国語を使わせざるを得ない面があり、また、既に外来語・外国語を用いた方がその日本語訳よりも分かりやすい場合もある。そうした場合は別として、一般的には、相手や目的に応じて十分な配慮の下に、その外来語や外国語を使用するか否かの判断がなされる必要があるだろう。外来語・外国語は基本的にその語に対する知識がないと伝達不能になることが多い。そういう意味で、広く国民一般を対象にしている官公庁、新聞・放送等では、簡単に日本語に言い換えられる外来語・外国語や耳慣れない外来語・外国語などは安易に使わないようにすべきである。どうしても使わざるを得ない場合は注釈を付けて使うなどの配慮が必要であろう。<sup>1)</sup>

すなわち日本語の中で、外来語の増加や外国語が過度に使用される傾向には問題があるとの見解が述べられ、和製英語の濫用についても日本語を乱すだけでなく、日本人の外国語学習にとって障害となるとの警鐘も鳴らしている。

日本語は元々、漢語に始まり次第に西洋言語などの外来語、外国語を取り入れることで表現の多様性を発展させてきた。そして昭和の終盤から平成の初頭である1990年前後にかけて、主にビジネス界や広告業界、マスメディアなどで横文字が激増する。ビジネスにおけるさまざまな業種や文化面で世界規模での交流が進んだ結果、外国語の語彙を和訳することが難しかったり、時には面倒であったり、あるいはそのまま横文字で使う方が格好いいなどの理由によって、日常的な日本語の中に外来語や和製外国語が非常に多く取り入れられる状況となった。

外来語の横文字氾濫が近年のことであるのに比べ、和製英語は戦後の1960年代を中心とする高度経済成長時代のころから、日本語の中に定着してきており、その意味で長い歴史がある。

大辞林 第三版によれば、和製英語とは英語の単語をもとに英語らしく作った単語であり、英語以外の欧米語まで含める場合は「和製外来語」「和製洋語」などと称される。<sup>2)</sup>

同じ横文字表現でも、外来語は発音をカタカナ表記したものだが、和製英語は日本人になじみのある単語を組み合わせて意図的につくられたものである。現在氾濫する外来語の横文字は、すぐには意味がわからないものも多い。しかし和製英語は元々日本人にわかりやすいよう作られた造語であり、意味がわかりにくいというものはほとんどない。たとえ文法上は誤りで、語彙の使い方としては正しくなくても、長い歳月にわたって日本語になじみ溶け込んできた経緯もある。多様な異文化ともうまく融合する日本文化の特徴が、言語の上でも発揮されていると考えるべきで、昨今濫用される外来語の横文字に対する批判とは一線を画すべきであろう。言語とは時代や社会に応じて変化していくもので、文法的に正しい、正確な表現しか認めないような狭義なこだわりは、コミュニケーションを窮屈なものにしてしまうに違いない。

### 3. 野球界の和製英語

日本の野球は1871年に初めて伝来して以後、長い歳月をかけ独自の発展を遂げてきた。野球の本場アメリカにおいては、野球といえば硬式野球が唯一無二であって、軟式野球や準硬式野球は存在しない。しかし日本では、より安全で多くの人々が手軽に楽しめるよう、硬式野球だけでなくボールの素材にゴムを使用した軟式野球や準硬式野球などが生みだされた。それ以外にも、外国人に比べればパワフルな打撃力に欠けるため、投手力と守備力を重視し犠打を多用する戦術を考え出した。とくに球種、配球など投球技術の探求に邁進したことによって投手力のレベルの高さは秀逸となり、これが現在多くの日本人投手がMLBで活躍し高い評価を受けていることにつながっている。

またMLBでは同点の場合、決着がつくまで何回でも延長戦を続けるが、NPB（日本プロ野球）では延長12回打ち切り、引き分け制度のあるルールを採用している。その他にも笛や楽器などを使い、旗を振りながら一定の統一感をもった応援する日本独特のスタイル、高校球児たちの聖地甲子園で開かれる高校野球への全国規模での注目の高さや、都市対抗野球や日本選手権などを頂点とした社会人野球の充実など、さまざまな面で本場アメリカとは違った日本独特の形を構築してきた。

その中で一般的に使用される野球用語には、和製英語や造語が多い。それらの多くは英語表現としては誤りで、英語を母国語とする人々には通じないものの、イメージをうまく捉えた表現でわかりやすいという点で非常になじみやすい。

「フォアボール（四球）」walk, (base on balls, ball four) や「デッドボール（死球）」hit by (a) pitchなどは、日本への野球伝来時に、日本語訳して使っていた用語をそのまま英訳したものと考えられる。

本来の英語表現とはまったく異なる単語を用いて表現したものとして、「イレギュラーバウンド」bad hop、「クッションボール」carom、「タイムリーヒット」an RBI single、「イージーフライ」Routine fly、「セーフティバント」a bunt for a hit, a drag bunt、「アベックホームー」Back-to-back homersなどがある。

英語表現が長すぎ、わかりにくい単語のものを日本人になじみのある英単語に変換したものは、「ランニングホームラン」inside the park home run、「ファウルグラウンド」foul territory、「セーフティバント」a drag bunt、「スリーバント」bunt with two strikes, bunt after two strikes、「ワンポイントリリーフ」spot reliever、「チェンジ」end of inning, inning is over、「トンネル」to let it go through his legs、「バックホーム」throw to the plate、「ホームイン」get [cross] home [the plate]、日本語と英語を合わせたものとして、「サヨナラヒット」walk-off single、「サヨナラホームラン」walk off home run, game-ending home run、その他では「ナイター」Night game、「エンタイトルツーベース」an automatic double、「レフトオーバー」Over the left fielder、「ベースカバー」Cover baseなどがある。

このように現在使われている野球用語では、その大部分を和製英語が占めている。英語表現としては正しくないし、英語を母国語とする外国人にも通じないものであるが、しかし日本語としてのなじみやすさ、言いやすいという点や、イメージが浮かびやすいということに優れており、まさに言い得て妙というべき、粋でしゃれた表現ではないだろうか。

1992年まで日本プロ野球機構（現：NPB 日本野球機構）のパシフィックリーグ広報部長を務め、そ

の後MLB（アメリカ大リーグ）への造詣の深さを活かし大リーグ通として活躍した故・伊東一雄氏は、自らのコラムの中で『日本ではこの「ナイター」が和製英語だと信じられている傾向が非常に強い。アメリカでは「ナイトゲーム」という呼び方が一般的なのだが、かと言って「ナイター」を和製英語だと決めつけるのは早合点である。アメリカの野球関係者などと話をすると、古い人たちは「オレたちの子供のころは、ナイターと言っていたよ」と口をそろえる。つまりは今は使われなくなってしまった“死語”なのである。実はそれも正確ではなく、今でも夕方4時ごろから行われるゲームのことを「トワイ・ナイター」と言っている例もある。いったいだれが、ナイターを和製英語などと言い触らしたのか。今となっては見当もつかないが、だいたい第二次大戦直後の日本で、ナイターなどというシャレた言葉を考え出す造語能力があったかどうか。現在の感覚だけで、判断を下すのは少々おかしいのではないか。また「ランニング・ホームラン」という言葉があるが、これは日本人が作り出した和製英語の典型である。アメリカでは「インサイド・ザ・パーク・ホームラン」という。要するに「場内本塁打」だ。しかしこの「ランニング・ホームラン」は和製英語として傑作だと思う。一言で情景が目に浮かぶではないか！英語ではないが「振り逃げ（たまには、見逃し逃げもあるが）」は言い得て妙。これを英語で言うと「セーフ・アット・ファースト・ベース・オン・サード・ストライク・ワイルド・ピッチ（またはパス・ボール）」と、やたらと長ったらしくなってしまう。』と述べている。<sup>2)</sup>

すなわち日本独特の発展を遂げてきた野球においては、本場アメリカの正しい英語表現より、和製英語で表す野球用語の方が日本人にとってイメージをしやすいといえる。英語では単に単語の組み合わせでしかないが、和製英語だとイメージが即座に浮かび、理解がしやすいのである。

かつてルームメイトだったアメリカ人と野球の話題をした際、ランニングホームランとサヨナラホームランは、英語の inside the park home run や game-ending home run に比べてはるかにうまい表現であり、日本人の言葉の感覚は素晴らしいと感心していた。

## 4. ゴルフ界の和製英語

ゴルフ用語にも数多くの和製英語が存在し、日本人ゴルファーがプレー中に使う語彙や表現の中に、外国人には全く意味が通じないものが多い。

例えば、各ホールで第1打を打つ区域の「ティグラウンド」は Teeing ground（ティインググラウンド）、基準打数の違いで称される「ショート」「ミドル」「ロング」のホールの呼び名は、それぞれ Par3（パー3）、Par4（パー4）、Par5（パー5）である。ショットを打つ前の風読みで使われる「フォロー」（後方から吹く風）は Tailwind（テイルウインド）もしくは Followingwind（フォローイングウインド）、後方から吹く風である「アゲンスト」は Headwind（ヘッドウインド）であり、グリーン周りの「ガードバンカー」は Green side Bunker（グリーンサイドバンカー）、基準打数より2打少なくグリーンにボールが乗ることを意味する「パーオン」は inregulation（イン・レギュレーション）、グリーン上のパッティングでボールが転がる方向を示す「フックライン」「スライスライン」はそれぞれ Break to the left（ブレイクトゥザレフト）、Break to the right（ブレイクトゥザライト）である。また和製英語ではないが、

巧いアプローチショットを意味する「寄せワン」は Up and down (アップ・アンド・ダウン) となる。ゴルフ雑誌の記事や随筆、あるいはゴルフ番組などにおいて、これら外国では通じない和製英語表現を正しい言い方に換えようとの意見が唱えられている。また個人が自由に自論を述べる SNS の中でも、専門家であるプロゴルファーやゴルフ解説者が、和製英語表現を堂々と使うのは如何なものかとの批判が繰り返されている。前述の野球にあるように、日本のスポーツでは和製英語は頻繁に使われている。その中でゴルフに関する和製英語だけ、ゴルフに携わる人々自身によって恥ずかしいとの自己評価と批判が行われ、排除や是正の意見が出されているように思う。

それに従うなら例えば「この左ドッグレッグのミドルのティグラウンドは何だか立ちにくい。風は左からのフォローでスライス打つと遠くなるね」という言い方は「この左ドッグレッグの Par4 の Teeing ground は何だか立ちにくい。風は左から Tail wind でスライス打つと遠くなるね」となるし「ガードバンカーにつかまってパーオンできず、寄せワンもならず、スライスライン読み切れずにダボになった」は「Green side Bunker につかまって in regulation できず、Up and down もならず、Break to the right のライン読み切れず Double Bogy になった」となる。

ゴルフ専門番組で、かつて「バーディートライ」と表現していたものを「バーディアテンプト」と言い換えているが、何か奇異に感じ疑問を覚えた。「トライ」Try は一般的に日常会話に使われるほどなじんでいるが、「アテンプト」Attempt はとても一般に周知されているとは言い難い。日本人にとってなじみのない単語をなぜわざわざ使うのか、どうしてあくまで正確な英語表現に固執するのか、番組制作に携わるゴルフ関係者やゴルフ界識者たちの意図が理解できない。

慣れ親しんだ表現を敢えて正式な表現に変換する言い方には非常に違和感がある。それは慣れだけの問題ではなく、ちょうど大学時代に講義で頻繁に横文字（英語、外来語）を連発する先生に辟易した思い出があるのだが、それと似た感覚である。平易な言い方をすれば、キザで、英語が出来ることを自慢たらしくひけらかし、正しいものしか認めないという融通の利かない頑迷さしか感じない。

スポーツはその黎明期に貴族や富裕階層が労働者階級を排除し独占していた歴史があり、イギリス発祥のゴルフも、限定されたクラブメンバーの制度で発展してきた経緯がある。クラブメンバーとなるには財力、人格、見識など厳格な審査があり、いわば選ばれし者たちの会員制組織の仕組みは特権意識を生みやすい。そのためゴルフ界では長らく、差別とはいわないが会員と非会員を明確に区別する思想が根づいていた。その一端として女性排除の風潮もあって、世界4大メジャートーナメントの一つマスターズトーナメントを開催するアメリカ、ジョージア州オーガスタの名門オーガスタナショナルゴルフクラブでは1934年開場以来、2012年まで80年近く女性会員の受け入れを認めていなかった。このように歴史的に特権意識や排他思想を含んだゴルフ界だけに、ゴルフをする人間は正しい英語表現を使う知性を備えるべきであり、スラングのような和製英語を使うことは好ましくないともいうことなのだろうか。和製英語を恥ずかしいという感覚は、ゴルフをプレーする者は英語に堪能であるべきと求めるようなもので、確かにゴルフはルールに忠実にプレーすべきだが、ルール遵守と用語を正しい表現でというのは全く意味合いが違うことであろう。ゴルフ界は今、プレー人口を増やそうとジュニア育成を図り、女性への優遇サービスを考えるなど、協会やゴルフ場それぞれが、さまざまな策を講じ懸命に努力している。しかしその一方でゴルフ関係者自身が、なじみやすい和製英語の用語を排除し、小難しい英語表現に正

そうとするのは本末転倒ではないだろうか。ゴルフも野球のように、イメージのしやすさや表現のユニークさを評価し、なじみやすい和製英語の良さを認める懐の深さを持つ方がよいと考える。

## 5. スポーツにおける和製英語の意味合い

日本語は「表音文字」と「表意文字」の混合体である。表音文字では文字は発音の仕方を表すだけで、その文字自体には意味をもたない。代表的な例はアルファベット、日本語のひらがなとカタカナである。一方「表意文字」の代表的な例は、日本や中国で使用されている漢字で、文字にはそれぞれ意味が存在する。日本語は表意文字である漢字と表音文字のひらがな、カタカナを混合して表記するため、読み書きが非常に複雑で、さらに同音異義語の存在は読み書きだけでなく、会話での聞き取りの上でも難しさがある。日本人は幼児期から十分な時間をかけて徐々に習得するが、例えば成人の外国人が日本語を学ぶとすれば、漢字、ひらがな、カタカナの文字についてそれぞれ読み書き、アクセントを覚えなければならず、習得するには大変な努力と労力が必要である。

そして和製英語の発展という観点では、表意文字の存在が寄与したのではないだろうか。文字を単なる発音記号としてではなく、意味をもたせることで言葉によるイメージを浮かべやすく、理解しやすい特長を生み出した。正確だがなじみのない英単語よりも、イメージに合致するなじみのある英単語を使う方がわかりやすく、しかもカタカナ表記のため読み書きの点でも覚えやすい。外国から伝わったものが多いスポーツでは用語も外来語がほとんどであり、普及活動の上からも老若男女が理解しやすく覚えやすい、言いやすい和製英語は日本独特であるが、極めて実用的な語彙なのである。

## 6. まとめ

表意文字を含む日本語表現は、単語や言葉にイメージを与えることができる。これは表音文字としての発音記号でしかない英語には無い特色である。異文化ともうまく融合や調和、同化を図ることのできる日本文化では、日本語もまた和製英語や外来語などの横文字カタカナ表記を取り入れることで、言語表現の多様性と柔軟性を示している。和製英語は英語など外来語のうち意味のわかりやすい語彙を組み合わせ、イメージの浮かびやすい言葉に仕上げている。和製英語の多くはわかりやすい、理解しやすい、使いやすいという利点を持ち、表音文字のカタカナ表記でありながら表意文字の漢字と同様にイメージさせることができる。外国人に通用しないからと卑下し、正しい語彙、表現に無理に変えようとする必要性は感じない。むしろ日本文化の独自性や言語に対する感性を示すものとして、堂々と使い続けられればよいのである。ゴルフにおけるパッティングの「フックライン」「スライスライン」「パーオン」「バーディトライ」「イーグルトライ」などは正しい英語表現ではないが、日本独特のイメージ優先のゴルフ用語として使っていくことに何ら問題はない。

ラグビーのノーサイドも、その高邁な精神は世界中のラグーマンが誇るべき概念である。それを表現

する粹なしゃれた言葉として、逆に日本から世界へと発信すればよいのではないだろうか。

言葉は時代とともに変遷する。短縮されたり使われなくなるものもあり、ニュアンスや概念が変わりゆくこともある。世界の距離が縮まり、国際交流の盛んな現代において、正しい外国語も重要ではあるが、正しい表現と語彙にこだわり外国人に盲従するのではなく、ある意味日本人の言葉に対する感性の豊かさを証明している和製英語に、もっと自信と誇りをもっていいと考えている。

#### 引用文献

- 1) 外来語の増加や日本語の中での外国語の過度の使用の問題 (1995 2014)  
[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihonngo/joho/kakuki/20/tosin05/06.html](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihonngo/joho/kakuki/20/tosin05/06.html)
- 2) 松村明編 (2006) 大辞林第三版 三省堂.
- 3) パンチョ伊東のメジャーリーグ通信 (2000 2014) [http://www.fujitv.co.jp/sports/column5/pc\\_00/pc0517.html](http://www.fujitv.co.jp/sports/column5/pc_00/pc0517.html)

#### 参考文献

- 1) 伊東一雄 (2003) メジャーリーグこそ我が人生～パンチョ伊東の全仕事～ サンケイ新聞ニュースサービス.
- 2) 小山 混 (2009) 英語とゴルフ―石二鳥 ゴルフダイジェスト社.
- 3) 西條雅浩 (2012) これが世界標準 実用ゴルフ英単語ブック 幻冬社ルネッサンス.
- 4) 佐藤尚孝 (2007) ベースボール和英辞典 開文社出版.
- 5) ジェームズ・スタンロウ (2010) 和製英語と日本人―言語・文化接触のダイナミズム 新泉社.
- 6) スティーブン・ウォルシュ (2005) 恥ずかしい和製英語 草思社.
- 7) 早川菊造 (2006) ゴルフ英会話辞典 改訂版 学生社.
- 8) マーシャ・クラッカワー (1994) 気楽にゴルフ英会話 NHK出版.
- 9) 村島定行 (2009) 漢字かな混じり文の精神 風詠社.